

野獣闘技に明け暮れた！ローマの休日のおあ胃袋

古代ローマのうづぼ料理や豚の乳房料理は、長く後世の語り草になっている。だが、市民がいつもこんなごちそうにありつけたわけではない。というより、庶民の日常はひき割りのムギを練ったスイトンが主食。朝食などはせいぜいぶどう酒に浸したパンと生のタマネギ、チーズといったところだった。

共和制以後、とくに貧富の差がひどくなってきたため、一般大衆が肉にありつく機会などめつたになく、その最大の機会は祭りの日、なかでも野獣闘技の開かれる日であった。野獣闘技場に野獣を放つて奴隷や罪人と戦わせるゲームは、別名「ウエナティオ（狩り）」ともよばれたように、このウエナティオの開かれる日と、祭りのために神に犠牲獣が捧げられる日には、庶民もたらふくその「払い下げ肉」にありつくことができた。なにしろ古代ローマでは、帝政時代ともなるとやたらと祝日がふえた。

暗愚の帝王が、庶民の人気取りのために「パンとサーカス」の野放図な政策をとったためである。共和制時代に年に六十日程度だった祝日が、帝政時代には一挙に百三十五日にもふえ、ローマのいたるところの競技場で奴隷や罪人や野獣の血が流された。

記録によると、ポンペイウスは、五日間の競技にライオン五百頭、ヒョウ五百頭を出



場させたといい、シーザーは一回の競技にライオン四百頭を、アウグストゥスはその在位中、ゾウ三千五百頭をかり集めてその血を競技場に流させたといわれる。有名なコロッセウムが完成した紀元八〇年の落成記念競技では、たった一日のショーのために、じつに五千頭もの野獣が血祭りに上げられ、パンとサーカスの狂宴は文字通り野獣の咆哮と悲鳴の中に明け暮れたのである。

闘技用の野獣はライオン、ゾウ、サイ、シマウマ、カモシカ、クマ、野牛、トラ、ラクダなどから、ワニ、サル、野イノシシ、山ネコ、カバなどほとんどすべての野獣におよび、当時のローマ帝国の全版図からくまなくかり集められた。

こうして、闘技のあと殺された犠牲獣の肉は、一般に払い下げられ、牛や豚などの肉がまだ十分供給できなかった時代の、庶民の胃袋を満たしたのである。

一説によると、ローマ人はこれら「死獣」の肉を決して口にしなかったというが、それはあくまで表向き的美談に過ぎなかったようだ。